

「トルコの西洋化に関する一考察」

ミュムタズ・トゥルハンを手がかりに

指導教官：新井 政美

学籍番号：8598149

南・西アジア課程トルコ語専攻

谷口 浩之

目次

序章	今、トルコの西洋化を考察する	3
1.	その目的と意義	
2.	本論文の構成	
第一章	西洋化と世俗化の史的展開	7
1.	押寄せる西洋化の波（18世紀初頭～1908年）	
2.	青年トルコ時代を迎えて（1908年～1950年）	
3.	民主党政権期から現代への潮流（1950年～1980年）	
第二章	ミュムタズ・トゥルハンの人と業績	15
1.	トゥルハンの生涯（1908 - 1969）	
2.	トゥルハンが残した業績	
3.	トゥルハンの思想	
第三章	著書 Garphılařmanın Neresindeyiz?	21
1.	導入	
2.	西洋化失敗の理由とあるべき方向性	
3.	我々は今西洋化のどこにいるのか	
終章	そして西洋化はどこに向かうのか	27
1.	1980年以降の展開	
2.	トゥルハン思想の妥当性とトルコのこれから	
参考文献一覧		31

序章 今、トルコの西洋化を考察する

1. その目的と意義

昨年の11月3日の総選挙で第一党となった親イスラム政党、公正発展党（AKP）のアブドゥラ・ギョル副党首が16日、首相に就任した¹。イスラム派首相の出現である。このニュースを見て、1996年を思い出さない人はいないだろう。1996年は繁栄党のネジメッティン・エルバカン党首が正道党との連立によりトルコ初のイスラム派の首相に就任した年である。1998年には軍部や市民団体の圧力により解散したが、ほぼ同時に結成された美德党は1999年の総選挙で実に16パーセント近くの票を得たのである。こうして時代を遡ると、1990年代は（今回の総選挙も含めて）イスラム復興の動きが盛んだったことで特徴づけられるだろう。

しかし、このイスラム復興の動きも実は変容しているのである。美德党は繁栄党に比べて急進派が少ないと言われている。繁栄党がイスラム的な色彩を強く押し出すことで大衆政党となったのに対して、美德党は穏健派と党内民主主義への動きによってイスラム政党として次の変容を見せていたのだ²。そして今回もその性質は変容しているように思われる。ギョル首相は民営化推進、税制改革などIMFの要求する政策内容を発表している。またアメリカの対テロ戦争に関してもNATOの一員として協力する意向を示し、親欧米路線を貫いている。繁栄党の時代では考えられなかったはずだ。

しかしここで一つの疑問が湧く。イスラム政権なのになぜ親欧米路線なのか。私はこの一見矛盾とも見えるこの状況こそが、現代のトルコ、そしてトルコ人のメンタリティーを体現していると思われてならない。トルコは「迷って」いる。これは私がトルコに留学していた際も日々感じていたことだった。

周知の通りトルコは20世紀初頭にケマル・アタテュルクによって、イスラム国家であるにもかかわらず政教分離（世俗化）を完成させた国である。宗教が生活の細部にまで権威を有していた状態を脱し、近代的に西洋化しようとして取り組んできた。一見すると後進的なイスラム社会から近代的な西洋社会へ移行し、万事成功した国家のように映る。しかし私には、（言い過ぎかもしれないが）ある意味前途洋々だったかもしれないまさにその時に、現在の苦悩が始まったように思えてならない。西洋に憧れつつ、イスラムも捨てきれない「迷い」が始まったのである。その「迷い」が今日でも継続していると

¹ 日本経済新聞、2002年11月17日

² 繁栄党と美德党に関する議論に関しては、間寧「トルコにおけるイスラム派政党の変容」『アジア経済』vol. 40, No. 11、1999、pp.57-63。

言っても間違っていないだろう。ただ、前述したようなイスラム政党が変容しているのと同様に、トルコの「迷い」もまた変容しているのではないだろうか。

ここで私は、一人の社会学者の存在を知った。20世紀初頭から始まった西洋化。現代から見てちょうどその中間点である1950,60年代に活躍したミュムタズ・トゥルハン(1908-1969)である。

彼はまず250年もの間トルコが目指している西洋化(近代化)の失敗を指摘する。そしてその原因は、トルコが表面的に西洋文明を輸入・模倣するばかりで西洋の本質がいかなるものかを理解しようとしなかったことにあると主張している。つまり真の西洋化とは、自国固有の価値を失うことなしに改革することだということである。自らを民族主義者(milliyetçi)と性格付けるトゥルハンは、近代社会を実現するということは自国固有の社会を実現することであると述べている。それに必要なのが「科学的思考」だということ。これに関しては第二章で解説することとするが、とにかく西洋化の実現のためには、自国文化との融合が不可欠であるというのが彼の主張である³。

さて、トゥルハンの主張を簡単にまとめたが、私は彼の思想が前述したトルコの状況を考える上で一つの手がかりになるのではないかと考えた。西洋化を推し進めながらなおもイスラム復興の動きを呈するトルコ。そしてそれにもかかわらず親欧米路線を採るギュル首相。まさにこれはトゥルハンの主張したような、自国の価値「文化」を失うことなしに西洋文明を取り入れようとする動きなのではないだろうか。このように考えると、親イスラム政党が政権を手にした今こそ、改めてトゥルハンを見直してみることの意義を感じる。

また、管見の限り、国内でトゥルハンに関してまだまとまった研究がなされていない、日本語の論文もない。彼の人物や考え方、著書を紹介するということもまた、本論文の目的である。

2. 本論文の構成

まず第一章では、現代に至るまでのトルコにおける西洋化の過程、取り組みについて明らかにする。トルコの西洋化について議論する際に、またトゥルハンについて考察する際に、改めて「西洋化」という視点からトルコ史を振り返ることは不可欠であり、

³ Tanel Demirel, "Mümtaz Turhan", Uygur Kocabaşoğlu(ed.), Modernleşme ve Batıcılık (Modern Türkiye'de Siyasi Düşünce, vol.3), İletişim, İstanbul, 2002, pp.228-233 (以下 Demirel と略記)

有益であるはずだ。焦点となるのが歴史的事実そのものではなく、西洋化の流れや西洋化に対する考え方の変化にあることから、史的事実内容の詳細には触れない。構成としては、まずトルコにおける西洋化の土台が築かれ、徐々にその兆候が現れ始める 18 世紀の初頭から始め、トゥルハンがひとつの大きな転換点と認識する 1908 年までを一区切りにしてまとめた。そして実際にドラスティックな形で西洋化に展開が見られた 1908 年の改革を見ながら、次の区切りを 1950 年とした。それはまず第一に、トゥルハン自身がこれ以後の歴史的事実についての評価を行っていないからであるが、それはたまたま、1908 年から 1950 年までを「青年トルコ時代」として一括りにする近年の新しい時代区分とも合致している⁴。そうしたことを念頭に置きながら次に 1950 年から現代へ向かう西洋化の流れを考察する。前述したようにこの時期に関するトゥルハンの解説はないので、史的事実とトゥルハンの思想の方向性を加味して自分なりにまとめていく。

次に第二章で、その西洋化を考察する手がかりとするミュムタズ・トゥルハンが、いかなる人物であったか、そしてどんな業績を残したのかを紹介する。まずトゥルハンが生まれてからこの世を去るまでの生涯を非常に簡単ではあるが概説する。次にトゥルハンの業績として、彼が果たした業務や実際にどのような教壇生活を送ったのかを紹介する。そしてこの章の最後として、トゥルハンの思想・主張がいかなるものであったかを概念的に要約する。この部分は第一章と第三章を考える上で最も基本的な内容となっている。

第三章では、ミュムタズ・トゥルハンの西洋化に関する提言が記されている代表的な著書、Garplılaşmanın Neresindeyiz?⁵ (1961) の内容に迫る。ここまでの章でトゥルハンの西洋化に対する歴史的認識やその思想内容を解説してきたことになるが、この著作の内容を理解することでより明確にトゥルハンの考える西洋化のあるべき姿とその位置づけが見えてくるだろう。この著作はトゥルハン自身にとっても集大成となる著作である。

終章ではこれまで行ってきた議論をまとめ、結論に結びつける。結局トゥルハンの思想にはこれまでなされてきたトルコの西洋化運動に対してどのような示唆が含まれているのか。そしてそれをどのように評価すべきなのか。さらにトゥルハンの死後今日に至るまで継続して進められてきた西洋化との兼ね合いから見て、その有効性はあり得るのか。さらにトゥルハンの思想における問題点は何か。こういったことを論点としながらトゥルハンに対する自分なりの評価につなげることとする。

なお、本論文の主題があくまでトルコの西洋化についてであるということと、著者

⁴ 新井政美 『トルコ近現代史』みすず書房、2001、p.5

⁵ Mümtaz Turhan, *Garplılaşmanın Neresindeyiz?*, Türkiye Basınevi, İstanbul, 1961 (以下 Turhan と略記)

の能力の限界から判断して、トゥルハンのそれ以外の著書、Kültür Değişmeleri⁶ (1951)、Maarifimizin Ana Davaları⁷ (1954) は取り扱わないこととする。なおトゥルハンの死後 1980 年にはトゥルハン全集が出版されている⁸。このことからトルコ国内におけるトゥルハンの評価を見て取ることができる。

⁶ Mümtaz Turhan, Kültür Değişmeleri, İUEF yayımları, İstanbul, 1951

⁷ Mümtaz Turhan, Maarifimizin Ana Davaları, Şehir Matbaası, 1954

⁸ Mümtaz Turhan, Bütün Eserleri, Yağmur Yayınevi, İstanbul, 1980

第一章 西洋化と世俗化の史的展開

トルコの西洋化はいつ始まったのだろうか。1839 年から始まるタンズィマートの時代からだろうか。それとも 1923 年の共和国成立からなのか。私はそのどちらとも思えない。トルコは地理的に見ても、その歴史を見ても「いつから」西洋化が始まったというふうに断定することはできない国だ。もっと、徐々に徐々に西洋の圧力を受け始め、そして今日もなお受け続けているといった方が正しいのではないだろうか。実際にトゥルハン自身も西洋化運動がいつ始まったのかは問題ではないと述べている⁹。目安として考えるならば、セリム 3 世が即位した年であり、同時にフランス革命の勃発や「東方問題」の発生などがあった時期で、「近代史の起点」¹⁰とも言われる 1789 年辺りなのだろうか。実際に 1789 年を一つの区切りにして、西洋化運動の始まりをセリム 3 世とする議論もある¹¹。あるいはトゥルハンは、前述した通りその著書 *Garphılaşmanın Neresindeyiz?* の冒頭で次のように述べている。

我々は 250 年もの間、西洋化問題を追い続けてきた。250 年近くの間、自分たちに何かが欠けていて、その活路を見いだす必要性があるということを経験してきた。そしてその間、様々な試行錯誤を重ね、それにもかかわらずなおうまくいかないという状況を繰り返してきたのだ¹²。

この記述から読みとれるようにトゥルハンはトルコの西洋化の始まりを 250 年前であると認識しているようだ。つまりそれは著書が出版された 1961 年から見ると 1789 年とはいかないまでも、確実に 1700 年代を指し示している。なおトゥルハンは、トルコの西洋化がタンズィマートから始まったという一般的な論拠に関しては、これを否定している。西洋文明を一方向的に受け入れるのではなく、自国文化と融合させるというトゥルハンの姿勢がここに表れている。西洋化は何年前と限定できるはずもなく、それ以前から見られた自然な流れなのである。

ここではトゥルハンのこの思いを念頭に置きながら、さしあたり 18 世紀初頭を起点にしてトルコの西洋化を振り返っていきたいと思う。なお、史的事実の評価に関しては可能な限り客観的にトゥルハンの主張を盛り込んだ。西洋化の問題を考えるトゥルハンが、トルコの西洋化の歴史をどう見ていたかを知ることは、西洋化に関する彼の見解を

⁹ Emre Kongar, "Mümtaz Turhan", Emre Kongar (ed.), *Türk Toplum Bilimcileri-2*, Remzi Kitabevi, 2001, p.258 (以下 Kongar と略記)

¹⁰ 新井、前掲書、pp.22-23

¹¹ 坂本勉、鈴木董 『イスラーム復興はなるか』講談社現代新書、1993、pp.20-23

¹² Turhan, p.5

理解する上で重要であると考えからである。しかしトゥルハンの死後はもちろん、共和国成立あたりからのトゥルハンによる史的事実の評価に関する資料がなかったので、トゥルハンの思想を加味した上で著者なりに判断を加えていくこととする。

1. 押寄せる西洋化の波（18世紀初頭～1908年）

このセクション（18世紀初頭から1908年）におけるトゥルハンの西洋化に対する評価に関しては、主にコンガルの評伝を参考にした¹³。

・18世紀初頭～1839年

トゥルハンはずちューリップ時代（Lale Devri）に言及している。トゥルハンによると、印刷所の設立により物質的な、またその産物である書物により精神的な変化が訪れたと主張する。知識の普及という、近代化のための決定的な要素を担う書物の印刷刊行が始まったことの意義は小さくない。またこの時期数多くの欧州人が流入し、改革の加速に寄与した。しかし、トルコが250年間西洋化を実現できなかった基礎要因がこの時期に発生した。オスマン帝国がそれまで西洋に対して抱いていた優越感が、この時期に変化し始めたのだ。カルロヴィッツ条約締結による「トルコの脅威」が消滅した時期である。このときにトルコ人が初めて胸にした西洋に対する無力感から生まれる劣等感が、西洋化を目指す上で効果的なひとつの心理的要因となった。

その後に訪れるセリム3世（1761 - 1808）は西洋文明を信奉し、フランスを目標として様々な改革を進めた。西洋化に関して言えば、特に大使館の設置は、国外に送り出されその後自己変革を遂げてくる官僚が出現するきっかけとなった。しかしこうした改革を推し進めたセリム3世自身もまだイスラム文明の中に留まっていた。つまり彼の改革は結局文化的な側面や「憧れ」に留まり、オスマン帝国の社会構造や思想の域にまでは影響を及ぼさなかったのである。この時点では西洋とイスラムの狭間で悩み、もがき苦しむまでは達していなかったのである¹⁴。

次に西洋化に展開が見られたのはマフムート2世（1785 - 1839）の時代である。トゥルハンによるとこの時代の特徴は、改革がもはや避けては通れない、義務的なものとなったことにある。一般的には、マフムート2世が実施した改革はそれまでの改革と大きく性質を異にし、オスマン帝国の社会構造に重要な影響をもたらしたと言われている。この指摘は決して誤りではないが、トゥルハンはこの時代を西洋文明の本質と実体、基

¹³ Kongar, pp.258-264

¹⁴ 新井、前掲書、pp.28-29

礎的要素の確立というその点においては他の時代と比べて何ら変化はなかったと主張する。ただ評価している点としては、主にフランスを手本として創設された軍医学校、音楽学校、陸軍士官学校などの教育機関の設立である。知識を伴った官僚が増加する起因となり、その後進められる西洋化運動に多大な利益をもたらした。しかしマフムート2世がもたらした最大の功績としてイエニチェリの廃止を忘れるわけにはいかない。それまであらゆる改革と近代化に対して常に対立してきたイエニチェリを廃止することで、次世代で活躍すべき人間を育てるという意味で西洋化の基礎を築いたと言えるだろう。

マフムート2世は西洋化改革と中央集権をある程度形にすることに成功したが、同時に当然ムスリム大衆の大きな反発も招いた。彼らは西洋化を目指す中央政府に対して、イスラム的価値観を伴ってこれに対抗した。西洋とイスラムの狭間に苦しむトルコ人の精神は、実はこの頃から滲み出ていたのかもしれない。

・1839年～1908年

1839年から1876年までのタンズィマートの時代（Tanzimat）に関してトゥルハンは、この時期の改革が今後の改革運動を語る上である種の基盤となったことを指摘したと同時に、しかし実際には重要な変化をもたらすことはできなかったと述べている。また当時の「上からの改革」は、もっぱら「上に立つ人間の」財産、生命、名誉の安全確保に終始したことになったが、注目すべき変化はこれ以外のところで発生していたのである。この点でタンズィマート期に取り組みされた数々の政治的改革は実際に無益であったにもかかわらず、他分野ではある程度の成功を収めた。例えば、「新オスマン人」による（トゥルハンは「新オスマン人」という言葉は使っていない）言語や文学の革新による思想運動や近代的教育機関の整備、また対外貿易の拡大や産業発展がいくらか見られた。

この時期は、西洋文化に触れ、吸収した官僚や知識人が本格的な活動に乗り出した時期であるとトゥルハンは指摘する。しかし施行された改革や新たに設立された組織が必要とする人材にはまだまだ十分な権力が与えられていなかった。そしてこういった人材が権力を手にしないまま明確な改革に乗り出してしまったことが、タンズィマートの最大の過失だろう。つまり裁判官を育てずに司法改革、教員を育てずに教育改革、エンジニアを育てずに工場組織改革してしまったということだ。結果としてタンズィマートはあまりに改革を急ぎすぎたために、無計画で明確な目的意識のない改革に終始した。

このようにタンズィマートによる「上からの改革」は西洋からの圧迫による「しかたのない措置」的な性格を帯びていたが、タンズィマートはその改革が「法の下」でなされたという点でそれまでの改革とは一線を画する。これに加えて「新オスマン人」の出現も重なり、オスマン帝国は確実に近代国家に一步近づくことになる。しかしそれは同

時に西洋列強による経済的植民地化の始まりでもある。いよいよトルコ人の苦悩が、目に見える形で姿を現し始めたのである。

「新オスマン人」の活動が帝国内で次第に影響力を深めていくと、アブデュルアズィズに続いてアブデュルハミト 2 世（1876 - 1909）による専制政治の時代が始まる。アブデュルハミト 2 世の時代は紛れもなく専制政治がしかれた時代だった。しかしまたこの時期に近代化が一層加速したことも否めない。したがって彼の時代の評価に関しては意見の分かれるところでもある¹⁵。

しかし、トゥルハンはこの時代が西洋化の流れにストップをかけたと明言し、アブデュルハミト 2 世を厳しく批判している。トゥルハンは「専制時代」を、改革がもはや政府による公の試みの域を越えて、社会に浸透した時代であると見なしている。また、文学においては、物語、小説のようなジャンルにおいて「形の上での模倣」を越えて、内容の観点でも模倣が始まったとしている。

同時にトゥルハンは、

アブデュルハミト 2 世は西洋化に対して敵対も支持もしていなかった。この件で彼が何をしたとしても、それは義務感に駆られたからであり、もはや避けては通れない状況にいると感じたからしたことなのである。

とも付け加えている。

19 世紀の近代化プログラムは、何よりもまず帝国主義的なヨーロッパに対する防衛手段として採用されたのである¹⁶。

2. 青年トルコ時代を迎えて（1908 年～1950 年）

・青年トルコ人革命の時代

1908 年、「統一と進歩委員会」による革命運動により、アブデュルハミト 2 世は憲法の復活を宣言し、第二次立憲制（.Meşrutiyet Devri）が成立した。参加者は多種多様で一貫した方針や意見の統一は見られなかったが、憲政と議会の復活を望むという点で一致していた。「統一と進歩委員会」は「反革命」の鎮圧をきっかけとして政権を握ることになり、この時期数々の改革が実行に移されることになる。

¹⁵ 新井、前掲書、p.91

¹⁶ メテ・トゥンジョク『トルコと日本の近代化 - 外国人の役割』サイマル出版会、1957、p.144-145

改革内容に関する詳細はここでは省略することとするが、トゥルハンにとってこの時期は非常に重要な時期であったと位置づけられている。なぜなら、西洋化という観点から見て第二次立憲制期に起こった特筆すべき変化は、なんとと言ってもトルコ・ナショナリズムが驚異的に昂揚したというその点であろう。トゥルハンも次のように述べている。

青年トルコ人革命は政治的領域だけに留まることなく、社会生活におけるほとんど全ての活動に影響を及ぼし、社会に根本的な変化をもたらした。殊に精神面で大きな影響を見せ、トルコではそれまで全く見るることのできなかつたきわめて重要な思想の潮流が出現した。来るべき改革へ向けて、国に心の準備をさせ、社会意識とアイデンティティを強化させるという形でナショナルな抵抗力を増強し、さらにナショナリズムの基礎を築くような国民による文学活動や思想運動をもたらした。このような時期を体験しなかったとしたら、それ以降今日に至るまでの改革は不可能だったであろう¹⁷。

トゥルハンはまだ、社会構造と文化の観点から第二次立憲制期をこれ程までに重要視しているにもかかわらず、政治の場面においては全く幻想を抱かなかつた。

大衆は「専制と自由」という正反対の目的と願望を支える共通の理想を持っていなかった。そのため、専制支配の後に突然現れたこの自由な体制の中で大衆が一つに団結することは不可能だった。

後述するが、トゥルハンには西洋化実現の一要素として民族主義、つまりナショナリズムの重要性に触れているのだ。さらにトルコ・ナショナリズムの重鎮ズィヤ・ギョカルプが活躍したのもこの時期で、トゥルハンには彼の「トルコ化、イスラム化、現代化」思想を支持すると共に自分の思想に反映させている。こういったことから判断すると、この時期に展開された思想の潮流は、トゥルハンが目指すべき方向性（自国文化を保持しながら西洋文明を取り入れるという思想）に近いと言えるだろう。トゥルハンが、西洋文明の中にイスラムを調和させ、その文明にムスリム・トルコ人として全面的に、しかも主体的に参入することを主張した当時のナショナリストたちから影響を受けているのは明らかだ。

タンズィマート以来の自由貿易で利益を得たオスマン人が主に非ムスリムであったように、オスマン帝国の実質的な支配階層は「トルコ人」ではなかつた¹⁸。それが、当初は文化的なものに限定されていたとはいえ、ユスフ・アクチュラやアフメット・アー

¹⁷ ここで挿入したトゥルハンの引用は、Kongar, p.263 において引用されていたものであり、トゥルハンの文献から直接引用したわけではなく、その文献も不明である。

¹⁸ 新井、前掲書、pp.133-144

オールらによって主張されたトルコ民族としての一体化の動きが出始めた。この状況は、トルコ・ナショナリズムの昂揚という点からはもちろん重要だが、同時に弱まったオスマン朝スルタンの政治的影響力に代わって、トルコの政治や世論をこれからリードしていくことになる新しい世代の出現という意味でも非常に画期的だった¹⁹。

とはいえトゥルハンは、社会構造や文化的な側面からこの第二次立憲制期の重要性をこれ程までも強調したが、政治的な側面においては何も実現しなかったという見方もしている。さらに振り返って、共和国の設立までの 200 年間、西洋の基本的な要素である科学的思考と自由な思考を理解するまでには至らなかった上に、この目的のために驚くべき時間を浪費してしまったとしている。ただしこの見解は当時のトゥルハンにとってみれば、「西洋文明と自国文化の融合に対する模索を我々は長期間にわたって行ってきた。これからはこういった数々の試みを無駄にすることなしに、実現に向かって邁進しよう」といったものではなかったらうかと筆者は想像をふくらますのである。

しかしそうした期待はすぐに崩れ去ってしまうことになる。

・トルコ共和国の成立

1923 年、トルコ共和国が成立した。ムスタファ・ケマルによってなされた数々の改革内容の詳細とその過程については今更ここで解説するまでもないだろう。ムスタファ・ケマルの一党支配期には、イスラミ的な伝統を徹底的に排除し西洋帝国主義に対抗した経済的自立が求められた。しかしその目的が西洋に対抗するためであったにもかかわらず実際の改革はといえば、イスラミ的な制度の代わりとしてあらゆる分野で西洋化が目指され西洋的な制度が取り入れられるという矛盾に満ちたものだった。この一連の行為はトゥルハンによって批判されるべきものであるかもしれない。なぜなら、既存の文化を排除することなく、新しい文化を融合させることで自国独自の文化を実現するという彼の思想に、180 度逆行するものだからである。そしてこれまでトルコがまがりなりとも試行錯誤を重ねながら西洋文明との融合を模索してきたその取り組み自体を真っ向から否定するものだったと言える。しかし同時にまた逆の立場も存在する。一党支配期に行われた諸改革が、それまでトルコを取り巻いてきた西洋化運動の流れの中にあり、「新オスマン人」たちの立憲主義の伝統を後継するものであるとも言われているのだ²⁰。しかしこの立場においては意見の分かれるところであるのでここでは議論しない。ただ筆者の判断からすると、トゥルハンの立場は前者だったのではないかと察する。

そうは言っても、ムスタファ・ケマルはそういった矛盾を克服するための手段として、トルコ・ナショナリズムの定着にも力を入れ、実際にこれもかなりの成果を上げた。今

¹⁹ 永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛『中東現代史』山川出版社、1982、pp.105-108

²⁰ 坂本勉、鈴木董『イスラーム復興はなるか』、pp.69-70

日のトルコ人なら誰でももっている驚異的な誇りがこの時期形成されたということは誰もが認めるところであり、この時期に形成されたからこそあれ程までのアタテュルク信奉もまた存在するというだけのことだ。それはさておき、「トルコ国民になる」という言葉を使ってトルコ・ナショナリズムの重要性を主張したトゥルハンにとって、これは一応の成果と言えよう。しかし果たしてこれが本当の意味でトゥルハンの言う「自国文化と西洋文化の融合」になり得たのだろうか。この一連のムスタファ・ケマルによる改革をトゥルハンはどう評価したのだろうか。トルコ国家にとってと言うなら分らないが、西洋化という観点から言えば否定的だったということは容易に想像がつく。しかし逆にもし肯定的だったとしたら彼の思想も一気に疑わしいものとなってしまいうだろう。ただし、残念ながらこれを確かめるために有益な資料であるトゥルハンの論文は手に入らなかったため²¹、この判断はあくまで筆者の推測である。

ムスタファ・ケマルの一党独裁期が終わりを告げると、イスメット・イノニユによって複数政党制が実現した。そのひとつの要因として恐らく第二次世界大戦後に広まった民主主義の風潮もあったのだろう。これまで官僚や軍人、知識人などに独占されていた政治が、大衆にも開かれることとなった。

3. 民主党政権期から現代への潮流（1950～1980）

・ 民主党の時代（Demokrat Parti Dönemi）

1950年、民主党が圧倒的な多数を占める議会で、民族資本を代表するジェラルル・バヤルが第3代大統領に就任した。国家資本主義を修正し、あくまでも自由経済の実現を目指すトルコに経済発展の兆しが見え始めたかに見えた。

自由経済は、確かに実現した。統計的には民主党政権下のトルコ経済の発展はめざましいものがあった。しかしその分当時の政策は非常に強権的だった。アドナン・メンデレス政府は短期的な経済成長ばかりを目指し、アメリカへ全面的に依存する形をとったため経済的な半植民地化という事態は免れなかった。海外依存に頼り、もはや自立できなくなったことで生じる矛盾はある意味必然だった。

一方で、民主党政権期において「イスラムの復活」の動きが見られた。しかしこの目的は票確保のためのメンデレスによる戦略にすぎないから、さして取り上げる必要のない事項であると筆者は認識している。こういった形での「イスラムの復活」はその後の

²¹ トゥルハンがケマルイズムに関する論文を1965年に発表している。Mümtaz Turhan, “Atatürk İlkeleri ve Kalkınma”, Bütün Eserleri-1, Yağmur Yayınevi, İstanbul, 1980

時代に思想潮流としては何の影響ももたらさない。したがってこの出来事が一般的に「イスラムの復活」と呼ばれていることに対して筆者は少なからず違和感を抱く。

民主党政権下の政策はあまりにも「無理があった」。1960年クーデタを引き起こしたのも自然な流れだったと言えるだろう。

・第二共和制の時代

クーデタ以後の60年代を特徴づける要素としては多様な思想活動の増加したことがある。民主的な内容を持つ新憲法の発布によって多様な言語・出版・政治活動が展開されたのである。この風潮の中でも特筆すべきはトルコ労働者党の結成だろう。この党の存在が、今後様々なイデオロギーを持つ政党の出現につながっていく。政局の多極化が進み、それが大衆レベルにまで及んだのである²²。こういった動きの中で政権に返り咲いたイノニユは、もはや共和人民党が一党支配体制期のような徹底した世俗化が不可能であることから、民主党政権期に吹き出していた矛盾を利用した。宗教的感情を近代的なイスラム主義へ導き、そこから世俗主義を存続させようとしたのである²³。

複雑な政策とイデオロギーが交錯した60年代の政局だったが、スレイマン・デミレルによる経済政策はという一応の成果を上げたと言える。もちろん工業発展の地域的な偏りや相変わらずの財政赤字は継続したが、経済開発の方向性はそれほど間違っていたのではないだろうか。輸入代替工業化プログラムや外国資本の導入による産業資本の発展などによって、「トルコ独自の」産業育成が進んだことは評価すべき点だ。この観点から見て、徐々に自国独自の価値の創出が進んだのではないだろうか。とはいえトルコはこれ以後1970年に続き1980年にも軍部クーデタを繰り返し、混迷の時代を生きることになる。

トゥルハンはトルコ史の中でもひとつの大きな転換期となった1908年に誕生した。しかしその時期に芽生え始めた思想運動の進展も共和国建国以降の強硬的なイスラム批判を基盤とする諸改革によってぷつぷつと途絶えてしまう。そのことによって生じた矛盾やほころびが次々に表へ吹き出した民主党から第二共和制の時代。トゥルハンはまさにその混迷の時代、1969年にこの世を去った。その先には何が見えていたのだろうか。

²² 間寧「民政移管後のトルコ」『現代の中東』No.2、1987、pp.42-47

²³ 新井、前掲書、p.261

第二章 ミュムタズ・トゥルハンの人と業績



冒頭で述べたように、トルコの西洋化を歴史から遡って考えるとき、彼の主張はきわめて重要であると考えられる。彼は西洋化の足取りを再確認し、それまで行われてきた西洋化にまつわる問題点の明確化に努めた。そしてそれに対するひとつの提言、一言でまとめるならば「自国文化との融合」によって生み出される独自の文化が重要であるという提言、を投げかけた。前述したとおり、この思想を今日のトルコ社会に照らし合わせると、非常に興味深い。

1908年に誕生し、1969年に人生の幕を閉じたトゥルハン。トルコという国家が最も劇的に変化していった時代である。この章ではそんな時代に生きたトゥルハンがどのような生涯を送ったのか、またいかなる業績を残したのかを考察する。

ミュムタズ・トゥルハンに関しては3つの文献を参考にした。逆に言えるのはトゥルハンの生涯に関してはそのくらいしか文献がないというのが現状だ。脚注にその3つの文献を示しておくが²⁴、最も新しくまた詳細な説明がなされていたのはコンガルによる評伝である。よってここでの解説もその大部分をこの文献を参考にしてまとめた。

1. トウルハンの生涯

ミュムタズ・トゥルハン は 1908 年、まさに青年トルコ人革命の年にエルズルムに生まれた。父親のシェリフと母親のジェブリエは共にエルズルムで由緒ある家柄の出身だった。トゥルハン は 3 人兄弟の長男で、幼少の頃から非常に勉強熱心だったといわれている。しかし 1916 年のロシアによるエルズルム占領によって、家族と共にカイセリへの移住を余儀なくされ、トゥルハン は初等教育及び中等教育をカイセリで受け、1924 年に卒業を迎える。高等教育に関してはブルサの後アンカラに移り、1927 年にアンカラの高校を卒業することとなる。翌年、国費奨学生としてドイツのベルリンとフランク

²⁴ “Mümtaz Turhan”, Ana Britanica, vol.30, Ana yayıncılık, İstanbul, 1994, pp.266-267 は、よくまとまってはいるが情報量はきわめて少ない。次に Hilmi Ziya Ülken, Türkiye’de Çağdaş Düşünce Tarihi, Ülken yayınları, 1979, pp.451-453 は前者よりは分量も多いが、体系的でない上コンガルの評伝と食い違う点が多い。したがって最も新しく情報量も豊富な Emre Kongar, “Mümtaz Turhan”, Emre Kongar (ed.), Türk Toplum Bilimcileri-2, Remzi Kitabevi, 2001, pp.215-290 を信頼することとした。

フルトの大学で心理学を学び、1935年には、フランクフルト大学で同分野の博士号を取得。その後帰国したトゥルハンは、1936年にはウィルヘルム・ペータース教授によって設立されたイスタンブル大学文学部で実験心理学科の助手に、さらに1939年には助教授に就任する。そして今度はイギリス政府からの奨学金を受け、1944年からイギリスのケンブリッジ大学に渡り、フレデリック・バートレット教授のもと文化変容 (Kültür Değişmeleri) のテーマで学ぶ。その4年後に2つ目の博士号を取得。再び帰国したトゥルハンは1951年にイスタンブル大学文学部の教授に就任すると同時に、翌1952年には、イスタンブル大学文学部の実験心理学科の学科長に任命される。続いて1960年には実験心理学研究所の所長に就任した。驚くべきことにどちらの業務も1969年に彼が亡くなるまで全うしたという。

他にもトゥルハンは1949年から1951年までの間、国連社会問題コミッション (Birleşmiş Milletler Sosyal Komisyonu) においてトルコ代表として参加していた。また国内でも数多くの学会に参加していたトゥルハンは、晩年にトルコ心理学会 (Türk Psikoloji Cemiyeti) の長も務めていた。

1969年1月1日の朝、患っていた肝臓ガンにより、60年の人生に終止符を打った。

なお、1943年に結婚したディヤルバクル出身の妻メヴヒベ・オゲルとの間には、ネスリンとフュゲンという2人の娘がいる。

2. トゥルハンが残した業績

トゥルハンは、1944年までゲシュタルト心理学に基づく知覚作用のテーマについて、また実験心理学の分野でもその先駆けとして精力的に研究に取り組んだ。西洋的という意味で、トルコで初めて実験心理学という学問を確立したといえよう。つまり初のトルコ人実験心理学者である²⁵。それ以降、つまりイギリスに渡ってからのトゥルハンは社会問題の研究を行った。社会学の分野にあたる研究を進めたわけだが、主にトルコの文化構造とその諸問題に関して社会学を深めていった。「文化において変容する要素、変容しがたい要素 (Kültür'de Değişen ve Değişmeye Mukavemet Eden Unsurlar)」というテーマの研究は、エルズルムを中心とした地域に住むロシア人と共に行った研究を基にしている。また「現地での観察調査 (Yerinde gözlem)」という方法を利用し、可

²⁵ トゥルハンは西洋化問題を分析する際、常に歴史 = 経験を客観視することから解決策を模索した。その当時にしてみればこの手法はトゥルハン独自のもので、それはデミレルによると「社会心理学的な」、またコンガルによると「現象から見る帰納法的な」手法と言われている。トゥルハンの文章がまず過去を振り返ることから始まるのは、この実験心理学の影響からだろう。

能な限り明確なアンケート調査を通して行った研究によって、トゥルハンは国内の環境社会学 (çevresel sosyal psikoloji) の先駆けであるといわれている。

また前で少し触れたが、マルマラ大学のスィナンギルによると、ミュムタズ・トゥルハンはアンカラ・ガーズィ研究所のムザッフェル・シェリフ²⁶と並んでトルコの心理学界における第一人者と称されている。トゥルハンとシェリフは独自にトルコで初となる心理学調査研究を行った。その研究の主なテーマは社会変容・文化変容の与える心理学的衝撃と急速な技術革新がもたらす心理学的衝撃だった²⁷。

このような研究がドイツのヴェルトハイマー教授やイスタンブールのペータース教授、そしてイギリスのバートレット教授などの著名な教授に注目され、同時に高く評価されたが、トゥルハンは彼らと肩を並べるだけでなく親交も深めた。そういった過程において、科学的思考を携え、客観的且つ中立で信頼性のある彼らのような存在はトゥルハンにとって大きな意味を持っていた。またトゥルハン自身は教育することに多大な喜びを感じていた。実際に、単独で任された学科で15年という短期間の間にその生徒全員が博士号を取得し、そのうち8人は欧米で研究する機会を与えられ、留学したという。

トゥルハンはそのアカデミックな人物像とは別に、国家の問題に深く関わる社会的な側面も持っていた。トルコにおいて民族主義的な目的で発生した科学的な思想潮流の中で最も重要な人物の一人として挙げられる。さらに国家教育にまつわる問題を深める中で、国家発展のために西洋の技術を身につけている人員を増強する政策の重要性を主張した。国家の問題を対象とする一般向けの文献は、晩年に高い売れ行きを見せ、その多くが4, 5回の刷を重ねた。

物静かで品位があり、非常にまじめだったと言われるトゥルハンは、殊に自身を取り巻く若者に対して気を遣う、寛容な心の持ち主だったという。

3. トゥルハンの思想

それでは実際にミュムタズ・トゥルハンの思想とはいかなるものなのか。ここではトゥルハンの西洋化の問題点とそれに対する提言を中心に解説する。なおここでは第3章で紹介する著書 *Garphılaşmanın Neresindeyiz?* に即した方法ではなく、トゥルハン

²⁶ シェリフに関してここでは取り上げないが、トゥルハンに関する記述のあるコンガルの著書 *Türk Toplum Bilimcileri-2* の中でトウライ・ボズクルト・シムシェクがシェリフに関する考察を掲載している。

²⁷ Handen Kepir Sinangil, "The Development of Industrial / Organizational Psychology in Turkey", <http://www.siop.org>

の一般的な主張と思想内容について論じたい。

トゥルハンは一般的にトルコにおける西洋化の思想者として認知されている。彼はオスマン帝国期からその当時まで取り組まれてきた西洋化運動の失敗を確証し、新たな西洋化の形体を検証しようとした。トゥルハンによると、トルコは継続的に変容、あるいは改革せざるを得ない状況に置かれてきた。したがってトルコの西洋化は必然性を帯びたはずである。しかしそれでもなお実現しなかったのは、西洋(文明)の本質そのものを理解しようと努めなかったからだ。それを理解することなく、次々に物理的な要素ばかりを輸入したため、結果的に表面的なものとなってしまった。こうして単なる模倣に止まっていたのでは全ての要素は定着せず、機能しない。それだけでなく旧来のものの代わりに新しいものを据え置くことで社会構造の根本が崩れてしまうことになる。そこでトゥルハンが主張するのが、これまで何度も述べてきたとおり、「自国文化との融合」だ。まず西洋の本質を理解することで、必要な要素を適切に選択し、取り込むことができる。そのために自国文化や社会基盤を崩すことなく、その中に浸透させることができる。よって両者は共存し、「融合 (sentez)」が実現するのだ²⁸。

さて、それでは自国文化の価値を保持し、西洋の本質を理解するためにはどうすればよいのだろう。デミレルの解説によれば²⁹、トゥルハンは主に「民族主義 Milliyetçilik」、「科学(学問) İlim」という2つの側面から解決策を模索しているので、さしあたりその2つのキーワードを用いてトゥルハンの思想を解説する。

() 民族主義 Milliyetçilik

トゥルハンによると本当の意味で西洋化するというのは、まずいかにして自国独自の文化を生み出し、トルコ国民となり得るかということである。

文明的な社会になるということとトルコ国民になるということは全くもって同一である³⁰。

自国文化の創造は、全てのトルコ人が望む経済発展にも密接に繋がっていく。分かり易い事例としては、前記した60年代の外国資本の導入等による産業資本の発展による「トルコ独自の」産業育成が挙げられる。それが結果として自国独自の価値の創出に繋がりがえる。もし民族主義が弱ければ、西洋から受ける政治経済的・文化的な圧迫や武力

²⁸ こういった思想については次章で取り上げる Garphlaşmanın Neresindeyiz? (1961)ではもちろんのこと、代表的な著書 Kültür Değişmeleri (1951)の中でも全く同じ内容が記述されている。このことからまさにこの思想がトゥルハンの根幹を形成しているといえる。

²⁹ Demirel, pp.229-231

³⁰ Ibid. , p.229

による脅威や、西洋化の失敗から来る精神的絶望感などが西洋に対する劣等感となって蓄積されてしまう。それに加えて表面的な輸入による自国固有の文化と社会基盤の崩壊が追い打ちをかけるのである。こうした状況を分析するとともに憂いだトゥルハンは、民族主義（「ナショナリズム」という訳の方が分かり易いかもしれない）の必要性を強く感じたのである。

また冒頭でも指摘したように、トゥルハンは自身を民族主義者（milliyetçi）だと見なしている。彼は西洋化という単語一つでも、一般的な「Batılılaşma」を使わずに敢えて「Garphlaşma」を使っている。この他にもトゥルハンの書物においては基本的にアラビア語起源の単語が数多く使われている。このことから彼の基本姿勢は明らかである。

（ ）科学(学問) İlim

西洋化の実現のためには西洋の本質を理解する必要があると述べた。トゥルハンによると、その本質を理解するために不可欠な絶対的な要素が「科学」である。またその本質はというと、科学と実生活に関わる技術、そして人権の保証などを基盤とする法律と自由である。そして西洋文明は全面的に科学に対して信頼を置いている。したがって、真の西洋化とは、科学と科学的思考（ilim ve ilim zihniyeti）をいかにして定着させるかということである。さらにその条件として必要なのもまた法律と自由である。トゥルハンは、法律と自由の定着を科学的思考のひとつの派生であるかのように捉えている。

そして、前で述べた「自国文化との融合」を実現するために必要なのが「科学的思考の獲得」だということになり、これら2つの主張は密接に繋がっているのだ。

それではトゥルハンにとって科学とは何だろうか。もちろんその言葉の通りの「技術」や「合理的思考」という意味を表すのであり、実際にトゥルハンはこれらを最重要なものとして捉えている。しかし、もっと別の捉え方をするならば、科学は「普遍的なもの」を示すのであって、トゥルハンが求めたものはまさに「普遍性」なのではないか、という筆者なりの見解がある。これに関しては多少詳しく説明しておきたい。

トゥルハンはキリスト教文化について、キリスト教は西洋文明を形成する一要素にすぎないので、西洋諸国はキリスト教文明だから発展したという見解を完全に否定している³¹。ある国家が西洋化するということは、西洋の文化や宗教的要素を取り入れ模倣することではない。例えば「平等」や「基本的人権」といった観念を聞くと、いかにも科学的で普遍的な要素であると捉えがちである。しかしそういった観念は科学的思考から生まれたのではなく、元来宗教的観念から派生したものに他ならない。ところがそれを

³¹ Turhan, p.14

科学的事項として西洋化の過程で取り入れてしまうと、結果として西洋文明の本質を見失い、キリスト教文化ばかりをイスラム社会に輸入することになる。当然の如く外来の文化が接木的に土着に居座ることになる。そして外来のキリスト教文化は土着のイスラム文化を乱し、破壊し、最終的に消滅させてしまうことになる³²。少し回りくどい説明となったが、まとめるとキリスト教文化は普遍的であると認識されがちだが、実際は普遍性を帯びていないということだ。そしてトゥルハンは、西洋化を実現するには西洋文明の本質を理解する必要がある、と繰り返し述べている。ここで言われる「本質」というのがまさに「科学」である。そしてその科学はまた「普遍的」であるから、どんな宗教を持ったどんな国家であっても、それを取り入れれば西洋化が実現するのだ。こうして考えればトゥルハンの言う、取り入れるべきものはキリスト教文化ではなく科学であるという主張も容易に理解できる。「科学的思考」という概念についても、キリスト教的観念に基づいた思考と対比して考えることで、キリスト教的ではない普遍的思考を表していることが分かる。

³² 外来と土着の議論に関しては、山本新『周辺文明論 - 欧化と土着』刀水書房、1985。を参考にしたが、主に宗教の面からトルコの西洋化に関して実に興味深い議論を展開している。筆者がトゥルハンの「科学と科学的思考」の概念を理解する上でその助けとなった。またその主張はトゥルハンのそれと共通する部分が多々あり、トゥルハン思想を別の角度から見ることのできるきわめて重要な議論であると認識している。

第三章 著書 Garphlaşmanın Neresindeyiz?

1. 導入

さて、ここまでミュムタズ・トゥルハンの一般的な思想や歴史認識を見てきたが、この章では、本論文が研究対象とするトゥルハンの著書、Garphlaşmanın Neresindeyiz? (「我々は西洋化のどこにいるのか」)を具体的に考察していくことにする。この著書は1961年に出版され、既に出版されていた Kültür Değişmeleri (「文化変容」)及び、Maalifimizin Ana Davaları (「我々の教育における主な諸問題」)という二つの書物の中で彼が扱わなかった問題や議論を取り上げている。トゥルハン自身が述べているように、この二作品とこれから考察する作品はいわば三部作を成している³³。

トゥルハンがこの文献を著すにあたって抱いていた意識は、当時のトルコはその歴史の最も危機的な時代にあるという歴史認識であった。オスマン帝国末期から始まった西洋化運動は成功したとは言えず、社会生活の場において多くの要素が破壊された一方で、新たに成し遂げられた要素がないという事実は深刻な文化的危機をもたらしているとトゥルハンは述べている³⁴。そしてその危機から脱却するためには国民全体の力を、社会構造自体を強化するために結集しなければならないと言うのである。彼によれば、西洋化に失敗するという事は、工業発展も民主主義のための闘争も、またいかなる社会経済的活動も成功する可能性を絶たれることを意味する。

このような問題意識からトゥルハンは Garphlaşmanın Neresindeyiz? において西洋化のために何が必要なのかを探っていくのである。

2. 西洋化失敗の理由とあるべき方向性

トゥルハンはまず、「我々の最大の問題点 (En Büyük Davamız)」と題された第一章においてトルコの西洋化運動に対する様々な代表的議論を取り上げ、それに検討を加えている。ここではまず、トルコの知識人たちの間では一般的に西洋化に対して二つの基本的態度が見受けられるとされている。第一の態度は、アタテュルクによる改革によってトルコの西洋化運動の本質的な部分は完成し、変革されずに残っている改革も近いうちに自ずと実現されるだろうという信念である。この態度をとるグループに属する知識

³³ Mümtaz Turhan, Garphlaşmanın Neresindeyiz?, Önsöz

³⁴ Ibid.

人は、「基本的な問題はこれら（既に達成された）諸改革の維持と民衆への普及であり、必要ならば武力措置に訴えることをも支持する」³⁵という見解を持っていると、トゥルハンは述べている。

これに対して第二の態度をとるグループは西洋化運動が達成されたという主張を認めず、西洋から取り入れなければならない数多くの要素が残されていおり、したがってまだまだしなければならぬことは多いという基本姿勢をとっている³⁶。

さらに、このトルコにおける西洋化の困難を強調する第二のグループは以下の4つの主張に分類されている³⁷。

1：そもそも西洋文明の起源はギリシャ・ラテン文明であり、トルコはこの文明との連続的な接触を維持してこなかった。したがって、このギリシャ・ラテン文明にまで遡らない限り西洋化の実現は不可能である。

2：西洋文明はギリシャ・ラテン文明の流れの中で発生したキリスト教文明であり、西洋化を実現するためにはイスラム教とキリスト教の本質的な和解が必要である。

3：今日の西洋文明は、我々が西洋化を開始した当時に存在し我々が認識していた西洋文明ではなくなっている。そして、この過去と現在の西洋文明の間に横たわる相違に気づかず、未だに西洋文明はトルコが西洋化を始めた当時のものと変わっていないという認識の下に行う西洋化運動には決定的な欠落がある。

4：トルコ人は元来遊牧民族であるために文明化できない。或いは革新的な改革への活力を既に消耗してしまったためにトルコは西洋化を実現できない。さらに、今日の西洋文明自体が同様に衰退期に入っている。

このようにトゥルハンは西洋化の実現に対する悲観主義的態度の主張を分類し、さらにそれぞれを科学的手法によって検討している。ここで社会学者としての彼にとって重要なことは、その際に社会人類学、文化社会学、及び社会心理学を適用することであった。

これらは当時のトルコではまだそれ程普及した学問体系ではなかったが、これに対してトゥルハンは、

この学問を学んだ場合、それが西洋化という問題を考える上で我々を導いてくれることとなり、多大な利益、特に文明と文化に関する概念や制度、諸活動において我々が啓蒙されることは確実である³⁸。

³⁵ p.6

³⁶ p.6

³⁷ pp.6-7

³⁸ p.8

と上記した 3 つの学問の重要性を主張している。

では次にトゥルハンが、彼の挙げた西洋化に対する 4 つの悲観的見解にどのような批評を展開したかを見ていきたい。

まず、最初の、西洋文明の発展における歴史的起源であるギリシャ・ラテン文明を体験しなければトルコの西洋化は困難であるとの見解について、トゥルハンが現代西洋文明の水準に追いつくために必ずしも非西洋諸国はヨーロッパが体験した発展段階を経験する必要はないと指摘した後、発展途上にある非西洋諸国が西洋の歴史的体験を追体験すべきだと主張する知識人に反駁する。このような意見を唱える知識人は特に古代ギリシャ語とラテン語を重要視し、ヨーロッパ文学や芸術知識の習得を西洋化の条件だと考えてきた。しかし、トゥルハンがまさにこの点において見解を異にするのである。非西洋諸国が西洋化のためにしなければならないのは、このような西洋文化の歴史的発展段階を追従するのではなく、コペルニクス、ガリレオ、さらにデカルトらによって生み出された客観的な科学を修得することにある。したがって、ギリシャ語やラテン語ではなく、ここで学習されるべきはドイツ語や英語など、現代ヨーロッパで使用されている言語であるべきだ、というのがトゥルハンの主張である³⁹。

次に、2 つ目の、西洋文明とキリスト教を同一視し、イスラムがこれと和解しない限り西洋化は不可能だとする主張に対して、トゥルハンが次のようにコメントしている。

確かに西洋文明がキリスト教文明の一形態であること、そしてその本質的要素の一部がキリスト教的要素を含んでいることは疑いのない事実である。しかし、この文明に加わるためにキリスト教を受け入れなければならないとか、イスラム教が我々の西洋化に対する障害になっていると考えるのはまず大きな誤りである⁴⁰。

なぜなら、キリスト教文化は西洋文明の本質を支える様々な要素のある一つの要素にすぎず、必ずしもキリスト教文化の獲得が西洋化の成功をもたらすわけではないからである。例えば、同じキリスト教文化圏に属するロシアは、西洋化の実現のために特別な努力を迫られる一方、日本においては宗教的な相違は西洋化の障害にはならなかったのだ。つまり、イスラム教的要素は西洋化を妨げる要素であるとはじめから決めつけるべきではないと、トゥルハンが主張している⁴¹。

3 つ目の、トルコ人は元来遊牧民族であるために文明化は不可能であるという主張に対しては、遊牧という習慣は生物学的な意味において西洋との相違を表しては決しておらず、それはただ単に社会構造の相違であるから、トルコ人が先天的に文明的になれな

³⁹ p.13

⁴⁰ p.14

⁴¹ pp.21-22

いということの意味するものではないとして、否定している⁴²。

そして最後に、西洋化の過程において、単なる模倣ではなく自国の価値観と西洋のそれとを融合・合成させ、自国独自の（トルコ固有の）価値を守っていかなければならないのだと警告している。

さて、以上のようにトゥルハンは、トルコの西洋化は不可能もしくは困難だとするそれぞれの主張に対して異議を唱え、これらの悲観的見解は説得力に欠けるし、また事実でもない述べている。

では、トゥルハンが考えるトルコの西洋化における失敗の理由とは、何だったのだろうか。それは、「西洋文明を適切に理解していないこと、この文明の本質的要素が何から構成されているのかを正しく把握できていないことであり、つまり西洋化という取り組みをどこから始めるべきなのか、何をすべきなのか、そしてどのようにそれを実行に移すのかを理解していないこと」⁴³である。

西洋文明を生み出し、今日の水準にまで発展せしめた重要な要素は、ギリシャ・ラテン文明から続く歴史的体験でも、またキリスト教的影響でも、西洋人の生物学的人種の優秀性でもないのだ。現代の西洋文明を特徴づける本質とは、まさに合理的精神を備えた科学（İlim）と、さらに日常生活で実用化され、具現化された技術（Teknik）である。

ところで、トゥルハンにとって、オスマン帝国が西洋化にあえいでいた時期に急速に近代化に成功した日本は非常に興味深い対象であったようである。ここでトゥルハンは、西洋化への一番の近道はその科学の導入であるとしたバーナル(J.D.Bernal)の著書、*The Social Functions of Science* からの解釈を引用している。

日本人は、西洋諸国による侵略と略奪から自分たち自身の武力によって防衛するために、軍隊を発展させ、強化させうる技術の導入において迅速な理解を示した。きわめて客観的で合理的な日本人の思考は、西洋のこの際限のない優越性と能力が、その科学から発生したということ……を明白な事実として認識するに至った⁴⁴。

このことから分かるように、トゥルハンはある国家が西洋化するということは、西洋の文化や宗教的要素を取り入れ模倣することではなく、近代の西洋世界を創出した科学と科学技術を獲得する努力をすることにあると考えているのである。そしてトルコがあらゆる分野で西洋文明に追いつくためには、科学、より正確には自然科学の分野における融資や国家支援を増強する必要があり、同時にこれが最も効果的な投資であると断言

⁴² p.18

⁴³ p.25

⁴⁴ p.27

している⁴⁵。

3. 我々は西洋化のどこにいるのか

それではタンズィマート以来西洋化実現のための努力を続けているトルコは、その西洋化の過程のどこに位置しているのだろうか。トゥルハンによれば、まだトルコはそのスタートラインに立ったばかりであるというのである。確かにトルコの社会的状況は変化した。トルコ人の思考や価値観、服装、宗教や政治の実体、教育などを含む国民の生活全体は変化した。しかし、最も重要な科学技術の導入は遅々として進まず、科学的思考そのものが欠如しているのである。

一方で、日本やロシア、そしてアメリカ合衆国では、その国における宗教や政治体制、服装体系はヨーロッパのそれとは異なっているが、しかし科学的思考が普及しているというまさにその点において、西洋化を達成した国家として位置づけられるのである⁴⁶。

西洋化への取り組みを進める際、西洋から輸入する政治的社会的諸制度とその価値観が自国のものと適応ないし融合できるかということと、その国の風土と整合するかということを慎重に見極めなければならないとトゥルハンが主張する。もしここでの判断を誤ってしまうと、西洋化はその国の進歩・発展に繋がることはなく、逆に社会規範や人間関係、伝統的価値観の崩壊をもたらすという危険な側面を呈している。(例えば民主党時代から急速に進んだ欧米諸国の介入による半植民地化などを指し示すと考えられるが、これは往々にして他国においても見受けられる。)したがってトゥルハンが言うには、西洋化の実現のためには、自国の慣習や風習、伝統の中で全体的に文化変容を目指すべきで、それは西洋の宗教や服飾文化の模倣ではなく、何よりも科学と技術の獲得が不可欠である⁴⁷。

このようにしてトルコが西洋化に成功しなかった原因というものが次第に明らかになってくる。トゥルハンによれば、西洋文明の核心は科学的思考と合理精神であるということになるが、トルコはこの核心部分に迫る努力をすることはなく、100年以上にわたって人目を引くが格別重要ではないもの、例えば広い道幅の道路建設、公園の整備、ダム建設、ラジオや冷蔵庫の輸入、などに勤しんできたために、技術的な進歩や科学的思考の普及という点で大きな遅れをとってしまったのである。科学的思考は農業から工

⁴⁵ pp.31-32

⁴⁶ p.38

⁴⁷ p.40

業まであらゆる分野における発展を推進する必要不可欠な要素であり、トルコにおいて科学技術の普及と科学者及び教育者の育成が早急に必要であることを認識させなければならぬと、トゥルハンは呼びかける。

同時にトゥルハンは、個人の科学に関する知識の蓄積をはかり、科学知識を持つ人間を国家の知的財産と考えるべきであると主張し、そういった知識人 (ilim adamları) の重要性を説いている⁴⁸。第二次世界大戦で膨大な被害を被ったドイツが復興できたのも、また数々の試練を乗り越えてイスラエルが発展できたのも、そこに科学知識を備えた人間という財産があったからこそだと歴史的事例を紹介している⁴⁹。

総じてこの著作の中でトゥルハンは一貫して「自国独自の文化の創出」と「科学と科学的思考の重要性」を主張している。この2つのキーワードは第二章でも解説を施した通り、トゥルハンの基本姿勢を表している。(この著作の中では「民族主義」というキーワードを用いずに「自国固有の文化の創出」を議論している。) 著作全体を通して主張されている事項は基本的にこの2つであり、例えば他国との比較も引き出しながらこれらの重要性を何度も何度も形を変えて繰り返している。ここでは主張というよりこの本が出版された1961年に、その時代を生きる人々に対する提言(呼びかけ)と言った方が、この本の性格を適切に表現するかもしれない。

⁴⁸ pp.49-50

⁴⁹ pp.50-51

終章 そして西洋化はどこに向かうのか

1. 1980年以降の展開

・オザル政権

1980年代のトルコはトゥルグット・オザルの母国党が第一党となったことから始まる。オザルの経済再建政策はある程度の成果を生み出した。産業の育成や自由貿易の実現、あるいは国营企業の民営化などに繋がったが、逆に急激な資本主義的諸改革によって吹き出した問題も数多く存在し、根本的な国家発展にはつながらなかった。

しかし西洋化思想に関しては、80年代を通じて、「知識人の炉辺」に代表されるように、徐々にイスラム主義が知識人の間に広まった。これは新しい展開であると言えるだろう。オザル自身も「トルコ」と「イスラム」に加え、西洋に追いつくための科学技術の革新を強調するに至った⁵⁰。こうした80年代の一つの潮流はトゥルハンによって歓迎されるべき方向性であると言える。アタテュルクによって植え付けられたトルコ・ナショナリズムとは性格を異にする「イスラム」という概念の上に成り立つトルコ・ナショナリズム。第二次立憲制期から共和国建国までの時期に巻き起こった西洋文明とイスラムとの調和、さらに西洋文明の中でムスリム・トルコとして主体的に生きてゆこうとする主張がある意味で復活したというこの時期に関する評価⁵¹は、トゥルハンがこの時代に生きていたとしたら同じ評価をしていたに違いない。

・繁荣党の躍進

オザルと母国党が国民の信頼を失い始めると、それに代わってエルバカン率いる繁荣党の躍進が始まる。これはトルコにとって新たな思想の潮流以上に衝撃的な事実だった。ここで簡単にイスラム派政党の流れについてまとめておく必要があるだろう。

イスラム派政党は50年代（民主党の時代）から始まる急激な経済政策が生み出した貧富の格差、これに不満を感じた民衆の存在が土台となっている。ただ実際に表舞台に登場するのは70年代だ。その立役者であるネジュメッティン・エルバカンは1980年のクーデタで政治活動を禁止されていたが、87年に政界に復帰すると徐々に力を蓄え、96年にはタンス・チルレルの正道党との連立で政権を獲り、ついには首相に就任するまでに至った。

⁵⁰ 新井、前掲書、pp.292-293

⁵¹ Ibid.

このように驚くべきスピードで繁栄党が第一党となった背景には、民衆のニーズがあったからに他ならない。西洋諸国（欧米）はイスラム派政権の成立を危険視するが、これはもうおさまりのきわめて客観性に欠けた反応にすぎない。西洋諸国は一方的にステレオタイプ化された「イスラムの脅威」概念と共に非難し、同時にイスラムの後進性を主張する。しかしこれが軍部によって制圧されると、今度は武力による民主主義の抑圧であると批判する。西洋諸国は自らの価値観だけで判断しては決してならない。それができなければ（これまで様々な試み・政策を経験した）トルコがこれ以上何をやっても、もはや彼らの属国となる以外に調和の道は残されていないのではないだろうか。

少し話が逸脱したが、繁栄党は程なく軍部による圧力を受け、97年には閉鎖に追いやられた。繁栄党は確かに親イスラムだが、政権獲得の手段は議会制民主主義の枠内にあった。民主党政権と比べてみてもその手法は完全に「民主的」だった。政策においても、筆者の判断では、（あくまで思想的な観点からだが、）1950年来行われてきた諸政策に比べると遙かにトゥルハンの言う「西洋化」に近づいている。その点において、繁栄党政権は第二次立憲制期以降で初めて西洋文明とイスラムの調和やトルコ・ナショナリズムを実際に体現しようと努めた政権であるように見える。しかし得てして軍部は繁栄党政権を退陣に追い込んでしまった。これはトルコの将来を見据えた上で重大な過ちだったと言わざるを得ない。繁栄党が与党になったことは、国民の多数意見に基づいてトルコにおける政治と宗教のあるべき関係を見いだす絶好の機会であったかもしれないのに、その機会は変化を受け入れようとしない軍部の「非民主的」な圧力によって潰されてしまった⁵²。さらに別の見解を加えるならば、共和国建国以来近代化・自由化を目指しながら、一方で宗教に関しては全く自由を与えず厳しく国家が管理するという矛盾した状態が続いてきたとは言えないだろうか。そういったところから滲み出る矛盾を、時間は解決してくれない。しかし時間の流れは我々を待ってはくれないのである。

2. トゥルハン思想の妥当性とトルコのこれから

EU問題も佳境を極める今、もうトルコに時間は残されていない。トルコはこれまで積み重ねてきた数々の矛盾と真っ向から向かい合わなくてはならない段階にきているのだ。同時にイスラムのあり方についてひとつの結論を提示する必要がある。そのためのお膳立てはもう十分だと言えるだろう。そんな時代に親イスラム政党が政権の座に着いたのは朗報であると筆者は考える。上記の通り1997年に繁栄党政権の退陣によって、トルコは「イスラムとの調和」さらにいえば「西洋文明と自国文化の融合」を見だし、

⁵² 山本三樹彦「イスラームと民主主義の共存は可能か」内藤正典編『トルコから世界へ - イスラームと西欧化の間で』明石書店、1998、pp.45-71

この問題にとりあえずの決着をつける絶好の機会を失ってしまった。そのチャンスが2002年に再び巡ってきたのである。序章で触れたように、新首相アブドゥラ・ギュルはイスラム的価値を重視しながらも、積極的な親欧米路線を採用している。さらに彼は繁栄党政権期にエルバカンの下で、中東イスラム諸国との外交に携わっていたという事実もある⁵³。そのようなギュルが今後どういった政策を実行していくのだろうか。そして結果として「自国固有の価値」を創造することができるのだろうか。トルコ史上においても重要な転換期になる可能性は、十分にある。

ミュムタズ・トゥルハンが生きた時代は彼の思想が受け入れられ、実現する可能性は皆無に等しい状況だった。そういったトゥルハン思想に逆行する政策に邁進してきた20世紀中後期から時代は流れ、今トルコは逆にトゥルハン思想が有効性を帯びる可能性のある時代に変容してきている。EU加盟はもちろん非常に重要な問題だ。望む望まないに関わらず、トルコに経済的利益をもたらすだろう。しかしこれまでと同様に加盟を祈り、それに固執するだけでは自分の価値観でしかものを考えられないヨーロッパ諸国と融合することはできない。もはやEU加盟にこだわらずもっと広範な視野を持って、確固とした「自国固有の価値」という観点から政策を選択していく方向に向かうべきなのではないだろうか。

ただ同時に、トルコを取り巻く国際状況に関してはトゥルハン思想では語りきれない領域にきているのもまた事実だ。その原因はアメリカの対イラク攻撃問題である。1990年の湾岸戦争によりアメリカはトルコの戦略的重要性を改めて認識した。実際にアメリカはトルコの支持を獲得するためトルコのEU加盟をヨーロッパ諸国に求めているという内容も報道されている⁵⁴。そしてトルコもまた12月3日の外相会談でアメリカの基地使用を認めた⁵⁵。ところがヨーロッパ各国はといえばアメリカの対イラク攻撃に反対しているし、中東アラブ諸国はといえばこれもまた当然の如くアメリカに批判的だ。アメリカの対イラク攻撃、EU加盟問題の進展、さらに中東アラブ諸国に深い人脈を持つギュル首相。自体は今まで以上の複雑さを露呈している。

こうして今、トルコの目の前にはこれからのトルコの方向性に関わる様々な選択肢が提示されている。ここでの選択はトルコの将来を考える上で非常に重要だということはトルコ人自身が一番分かっているだろうが、他国に翻弄されすぎることなしに最大限の慎重さを持ってじっくりと方向性を定めてほしいものである。トゥルハン思想で語りきれない状況にきているのかもしれないと前で述べたが、彼の主張する「自国固有の価値の創出」という絶対的な目的は、今も変わらない。そして変えるべきでない。重要なのは、トルコがある重大な選択に迫られたときにその目的を思い起こすことと、その目的

⁵³ 八木麻里「トルコのEU加盟はなぜ実現しないのか」内藤正典編、前掲書、p.193

⁵⁴ 日本経済新聞、2002年12月6日

⁵⁵ 日本経済新聞、2002年12月4日

を実現するためにどの選択肢が有効かというまさにその観点から選択できるかどうかなのだ。そのためには客観的な広い視野とバランス感覚が絶対に不可欠だ。そしてそれはまたトゥルハンの言う「科学的思考」なのである。

このような複雑な状況の中で、今後トルコは実際にどういった方向性を選択していくのだろうか。いつの日か、もう「迷う」ことなしに「これがトルコだ！」という独自の価値が実現することを筆者は願ってやまない。

参考文献 (著者名五十音順)

日本語

- 新井政美 『トルコ近現代史』 みすず書房、2001
- 遠山敦子 『トルコ - 世紀のはざままで』 NHK 出版、2001
- 坂本勉、鈴木董 『イスラーム復興はなるか』 講談社現代新書、1993
- 坂本勉 『トルコ民族主義』 講談社現代新書、1996
- 内藤正典編 『トルコから世界へ』 明石書店、1998
- 永田雄三、加賀谷寛、勝藤猛 『中東現代史』 山川出版社、1982
- 永田雄三、加藤博 『西アジア・下 - 地域からの世界史 8』 朝日新聞社、1993
- 長場紘 「現代トルコにおけるイスラーム復興の諸相」 『現代の中東』 No.9、1990、pp.6-25
- 間寧 「トルコにおけるイスラーム派政党の変容」 『アジア経済』 vol.40, No.11、1999、pp.57-64
- 間寧 「トルコでの民営化」 『現代の中東』 No.8、1990、pp.52-58
- 間寧 「民政移管後のトルコ」 『現代の中東』 No.2、1987、pp.31-40
- バーナード・ルイス、白須英子訳 『イスラーム世界の二千年』 草思社、2001
- 松谷浩尚 『現代トルコの政治と外交』 頸草書房、1987
- メテ・トゥンジョク 『トルコと日本の近代化 - 外国人の役割』 サイマル出版会、1954
- 護雅夫、牟田口義郎 『アラブの覚醒 - 世界の歴史 22』 講談社、1978
- 山本新 『周辺文明論 - 欧化と土着』 刀水書房、1985
- N.アクシト、永田雄三編訳 『世界の教科書 = 歴史 - トルコ : 2』 ほるぷ出版、1981
- E.Z.カラル、永田雄三編訳 『世界の教科書 = 歴史 - トルコ : 3』 ほるぷ出版、1981
- 日本経済新聞、2002年11月17日
- 日本経済新聞、2002年12月4日
- 日本経済新聞、2002年12月6日
- 日本経済新聞、2002年12月15日

外国語

- Ana Britanica (vol.30), Ana Yayıncılık, İstanbul, 1994
- Emre Kongar (ed.), Türk Toplum Bilimcileri-2, Remzi Kitabevi, İstanbul, 2001
- Hilmi Ziya Ülken, Türkiye'de Çağdaş Düşünce Tarihi, Ülken Yayınları, İstanbul, 1979
- Masami Arai, Tansel Demirel (tra.), Jön Türk Dönemi Türk Milliyetçiliği, İletişim Yayınları, İstanbul, 1994

Mümtaz Turhan, Garplılaşmanın Neresindeyiz?, Türkiye Basınevi, İstanbul, 1961
Sina Akşın, Ana Çizgileriyle Türkiye'nin Yakın Tarihi (1789-1980), İmaj Yayıncılık, Ankara, 1998
Uygur Kocabaşođlu (ed.), Modernleşme ve Batıcılık, (Modern Türkiye'de Siyasi Düşünce.vol.3), İletişim, İstanbul, 2002

ウェブサイト

Handen Kepir Sinangil, "The Development of Industrial / Organizational Psychology in Turkey, <http://www.siop.org>